

旧東ドイツにおける日本研究 Japanese Studies in the German Democratic Republic

マルティン・グロヴァッツ (ライプツィヒ大学、ドイツ)

はじめに

皆さんは、日本の江戸時代である鎖国の時代を知っているでしょうか？ 日本人は国を出ることを禁止され、国に入ることを許される外国人が少なかった時代です。このような時代に生活することを想像できますか？ 私は想像できます。なぜかという、私も鎖国の時代の日本に似た国に生まれたからです。それが東ドイツです。このような個人的な背景を持っていて、旧東ドイツの地域に位置しているライプツィヒ大学で日本学を勉強していることから、旧東ドイツ時代の日本研究についてお話したいと思います。このテーマをよく理解していただくために、最初に、旧東ドイツはどんな国だったかを大まかに説明します。つづいて、日本とどのような関係があったかについてもお話したうえで、旧東ドイツでの日本研究の状況を詳しく説明したいと思います。

1. 旧東ドイツの概要

さて、旧東ドイツはどんな国だったのでしょうか？ 第2次世界大戦が終わってから、当時のドイツの地域はアメリカ、イギリス、フランス、ソ連によって占領されました。ソ連の占領地域には、1949年に旧東ドイツが建国されました。冷戦時代、旧東ドイツは、ソ連を中心とする東側諸国に所属していて、政治も経済もある程度モスクワの指導者の指示に従っていました。それに対して日本は、アメリカを中心とする西側諸国に所属していました。旧東ドイツを含む東側諸国では社会主義が普及し、日本やアメリカなどの西側諸国の資本主義は敵対的な社会制度と見なされていました。旧東ドイツは監視国家で、政府が国民の行動を厳しく観察していた国です。経済的な豊かさという点から考えると、社会主義の旧東ドイツは資本主義の国々より状況が悪かったです。これらが原因で、「国を出よう！ どこか遠い所で新たに生活の基盤を作ろう！」と思った人々が多くて、旧東ドイツを出てしまいました。国を出る人の数が増えすぎないように、政府は国を出ることを禁止

し、国境で防衛施設を建設して、銃を持つ軍人を配置しました。従って、ひそかに国境を越えようとした人は死ぬ可能性がかなり高かったです。この時代は、まさに江戸時代と比べられる鎖国の時代と言えるのではないのでしょうか？ この状況は1989年まで続き、1990年によりやく旧東ドイツと旧西ドイツの再統一がなされました。

2. 旧東ドイツと日本の関係

では、このような国家だった旧東ドイツは、日本とどのような関係にあったのでしょうか？ それにはまず、第二次世界大戦後の1950～60年代を見ていきましょう。戦争終結後、旧東ドイツも日本もそれぞれ、国の復興に全力を注いだので、お互いの関係を作る余裕はほとんどありませんでした。貿易関係があったことはありましたが、実際には非常に少なかったです。しかし、1960年代の終わりからは、この2つの国はお互いに近づくようになりました。「鉄のカーテン」に隔てられていましたが、旧東ドイツと日本は、確かにお互いに関心があったからです。当時日本は、高度成長期の真っ只中で、旧東ドイツを拠点として、東ヨーロッパの国々との貿易を目指していました。そして旧東ドイツは、西ヨーロッパやアメリカなどから貰えない先端技術を日本から手に入れようとしていました。そのような経済的な目的を実現するため、1973年に旧東ドイツと日本の外交関係が始まりました。

経済的な目的と並んで、2つの国はスポーツや文化においても、お互いに興味を持っていました。旧東ドイツのスポーツ選手の強さは国際的に有名で、1972年の札幌オリンピックには数十人の選手が参加しました。一方、ある日本人の手柄も旧東ドイツの首都、東ベルリンでよく知られています。皆さん、それは誰か、知っていますか？ かなり有名な人です。森鷗外です。森鷗外は日本の明治時代に留学でベルリンを含むドイツ各地を訪れ、医学やヨーロッパの文学などを日本に伝えた人です。彼の功績を称えて、1984年東ベルリンに森鷗外記念館が開設されました。

3. 旧東ドイツにおける日本研究

森鷗外記念館を設立したのは、東ベルリンのフンボルト大学です。フンボルト大学は旧東ドイツの大学の中で、日本研究を行っていた唯一の大学です。1973年に日本との外交関係が始まってから、日本研究はより重要な学問になりました。日本の事情を理解するため、言語学者、通訳者や翻訳者、そして日本の政治や経済、歴史や哲学などのあらゆる

分野の専門家が養成されました。日本研究の専門家は、当時のソ連に留学した人々が少なくなかったです。私が通っているライプツィヒ大学の日本学科の教授も、モスクワの大学で哲学を勉強してから、東ベルリンのフンボルト大学で近代日本の哲学を研究しました。

しかし、資本主義の国々と違って、社会主義の旧東ドイツの大学では、何を勉強したらいいか、何を研究したらいいか、それを決めたのは大学や自分ではなくて、政府だったのです。確かに日本に関するあらゆる研究分野がありましたが、政府はどれが一番大切だと思ったのでしょうか？ もちろん、経済です！ 経済的に強くなった日本は、旧東ドイツの重要な貿易相手になったからです。その他の分野、例えば文化、哲学、歴史などの分野でも研究は行われていましたが、経済に比べるとかなり少なくなかったです。

ヨーロッパの皆さん、日本の何が面白いと思いますか？ 日本の経済ですか？ 多分、経済よりアニメや漫画に興味を持っているのではないのでしょうか？ 現在は、アニメや漫画といった日本の文化が大好き、という理由で日本学を勉強している学生が世界中にとても多いだろうと思います。しかし、1970年代の旧東ドイツには、日本のアニメや漫画はなく、日本学専攻の学生の数はかなり少なく、全国に20人しかいませんでした。

このような難しい状況にもかかわらず、フンボルト大学の日本学科には優れたところもありました。それは日本語の授業です。フンボルト大学の日本語の授業は優秀で国際的に有名だったのです。授業で使われた教科書も同じ大学で作られていて、旧西ドイツのミュンヘン大学でさえも使われていました。

1981年、旧東ドイツでの日本研究に大きな影響を与える出来事が起きました。この年、日本政府が旧東ドイツの最高指導者、エーリッヒ・ホーネッカーを日本に招待したのです。この訪問によって、旧東ドイツと日本の関係はさらに深まり、より多くの日本の専門家を養成する必要性が高まりました。その結果、フンボルト大学日本学科の入学定員を増やすことを旧東ドイツ政府が決定しました。それに加えて、ようやく旧東ドイツの学生たちが日本の大学に留学することが出来るようになりました。これがきっかけで、先ほど述べたライプツィヒ大学の教授も、初めて日本を訪れ、1年間の研究をしました。興味深いのは、この教授がすでに日本の専門家であったにもかかわらず、教授にとってはこの時の訪日が、旧東ドイツ政府に許可された最初で最後の日本滞在になったことです。変ですよ。日本学者なのに、もう二度と日本に旅してはいけないって。日本学の学生たちも、日本に留学することが許された人は少数でした。どうしてこんなに厳しかったのでしょうか。想像できますか、皆さん？ 社会主義の旧東ドイツから逃げるつもりかもしれないと、政府に疑

われていた人々がかなり多く、国を出ることを禁じられていたからです。この結果、1980年代前半は、日本を訪れた研究者や学生はごく少数にとどまりました。

その後、旧東ドイツ時代の終わりである1989年の直前になって、若者交流プログラムが始まり、旧東ドイツの学生が50人も日本に留学することになりました。逆に日本人の学生も東ベルリンに留学に来ました。日本人の留学生について目を引くのは、勉強する分野が限定されていて、音楽、ドイツ語、ドイツ文学を勉強したい人しか受入れられなかったことです。

まとめ

ここまで旧東ドイツにおける日本研究の状況を紹介してきました。1990年に旧東ドイツと旧西ドイツの再統一がなされた後、東ドイツの全ての大学に西ドイツの大学の制度が導入され、幸いなことに日本に旅してはいけないという制限も解除されました。大学制度も研究も、そして人々の生活も自由になったのです。

これで終わります。ご清聴ありがとうございます。